

ハンナの戦争

ギオラ・A・プラウ著、松木清貴訳

ホロコーストを生きた奇跡の女性



を知ったハンナは三月、仲間と収容所を脱走し、森に隠れ住み、パルチザン活動を始める。と

ンへ行け」との父の遺言に従いイスラエルへ。港町ハイファの「女性入植者の家」に入り幼稚園の教師となる。そこで行方不明の弟と奇跡の再会を果たし、青年と結婚して生まれたのが著者。母の少女時代の苦勞話を、息子が本にまとめた。

恋人に「抵抗もせず、黙って殺されたヨーロツパの同胞たちはユダヤ人の恥だ」と言われ、ハンナは泣きながらパルチザンでの戦いを語る。ドイツ兵を撃ち、卑劣なポーランド人やウクライナ人の家を襲った。しかし、ハンナを助けたのもその異邦人、異民族だった。

父から習ったドイツ語をはじめ複数の外国語と母に教えられた料理、そして彼女の真摯な人柄が彼女を救った。世界には無数のハンナがいるのだろう。(ミルトス、税込2100円)

ところが、銃に倒れたハンナを助けてくれたのは、ナチスに批判的なドイツ軍人だった。この間、弟のエジユ以外は帰らぬ人となる。

ドイツ軍人の計らいでポーランドを出たハンナは、途中、身重の女性と知り合い、一緒にハンガリー、チェコスロバキアを経て四四年十月にオーストリアの製材所に落ち着く。四五年五月、終戦を迎えたハンナは「シオ

ユダヤ人女性、ハンナ・ホフベルグは戦前、ポーランド東部の生まれ。村のウクライナ人の間に反ユダヤ感情は強かったが、侵攻してきたソ連軍の共産主義の下で、むしろ平穏な暮らしをしていた。元村長の父は、高い文化を持つドイツが他国を侵略するはずがないと考えていた。

その期待が裏切られたのは、ハンナが大都市リヴォフの寄宿学校にいて、ソ連軍人と恋に落ちた頃。村に戻ったハンナの目の前にドイツ軍が現れ、ソ連軍が去ると、ウクライナ義勇軍によるユダヤ人弾圧が始まった。古い知人や友人による迫害に、ホフベルグ家の人たちは絶望する。

一九四二年二月、一家はゲットーに移住させられ、やがて強制収容所に移される。事態の深刻さ